
陰陽?列伝

B G L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽？列伝

【Nコード】

N8971Z

【作者名】

BGL

【あらすじ】

異能を持つ少年 羽村直人。

そのきっかけは、彼が15歳の時に交通事故に遭い、家族を失うことから始まる。

その日を境に、直人の世界は変貌する。

見えざるものが見え、見えざるものと対峙することを可能とする《見鬼》を双眸に宿す。

そして数年後、物語は始まる。

直人の友人

綾崎恢梨の些細な日常の変化を始めに、事態が

動き出す。

死してなお恢梨の背を守り続けた少女の願い。そして親友の苦境。
動き始めた災厄。

明かされる彼女の秘密。

失った恋心、死してなお想う恋心、報われない恋心、芽生えた恋心
その果てにある運命。

運命に翻弄された少年と少女の物語。

ブローグ 0 断ち切られた想い

気が付いた瞬間、もうダメだと　　そう思った。

足が縛りついたように、そこから動けない。咄嗟に避けるとか、その思考が頭から根こそぎ奪われたみたい。

横断歩道に突っ込んできた車がすぐそこにあった。

そもそも、そんなことを思考する暇があったかどうか……

グラウンドに引かれたコースを跳ぶように走り抜けていた脚は、この時、私を裏切った。

裏切られた私は……明滅する。

瞬く視界。強い砕けた音はたぶん私の骨の音　　そして浮遊感。

痛みはまだなく……道路に背中から叩きつけられた時も、苦痛はなくて、無理矢理肺から搾り出された吐息が、白い靄となって私の口から漏れ出た。

雨が降っていたのを覚えている。

紅い紅い……深紅色の雨。

ぼたぼた……と降り注ぎ、ざーっと酷い耳鳴りの音。

それが私の血だと気が付いた。曇天が赤いカーテンを引いたみたいに染め上げられていく。

ずっと身体に激痛の波が暴れだす。苦しくて、でも身をよじるこ
とすらできない。

私の身体はもう壊れていたから……

苦しいのにもがくこともできない。

生理的に震えるのは、死の痙攣のせい？

濃い絶望が、くつきりとした孤独感と一緒に押し寄せてくる。

「あ……ぐっ……あっ……」

声を上げたくても、溢れてきた血が邪魔で言葉すら封じられる。

圧倒的な恐怖。その奈落の黒さと断ち切られる未来の容赦のなさに震える。

涙が溢れる。

視界に大好きな……大好きな人の泣き顔が飛び込んでくる。

「ッ！ 歩ッ！ 美しいッ！」

ああ……でも聞こえない。聞こえないよ……もっと大きい声で……言って……

もっと傍で……寒い……身体奥まで貫く寒さ……

もう何も見えない。カーテンは全部引かれてしまって、耳鳴りが酷い。

五感が消失し、宙に浮く。

嵐のような焦燥。

（これで終わるの！？）

これが運命なの？ 私の想いは……これから証明し続けて……ずっと恢梨の傍にいたいのに……っ

やっと幼馴染から卒業して……これからは恋人として二人で生きていくのに……！

もっと、もっと早くに！

もっとずっと一緒に！

もっともっとッ！

突き上げてくる後悔、唐突に断ち切られた私の運命に激しい戸惑いと激怒。

こんなの……こんなの納得できないッッッッ！！

恢梨の泣き顔が掠れて見える。ああ……っ。泣かないで、恢梨、恢梨ッ！

その時、私は 見た。

恢梨の後ろ。人が集まりだした、その囲いの向こうから私を見て
いる黒いスーツの男を。

周りは集まりだした人の騒音に満ち、叫ぶ恢梨の声すら聞こえな
いのに、その男の声は不思議と耳に落ちた。

『こんにちは……』

納得も……そんなことは知らないとばかりに、運命は私の……命
を……未来を 全てを奪った……

プロローグ1 夢の終わり

黄昏時に目を覚ました。

当然だ。眠っていれば、絶対にいつか目を覚ます。
だが目を覚ましたくなかった。まだ眠っていたかった。……優しい夢を見ていたかった。

とりわけ今日は。

「歩美……ッ」

見ていた夢で、網膜に鮮烈に焼きついた少女の名前を愛しさそれと同様の悲哀さをもって呟く。

歩美を忘却しそうになったら 忘却するといっても、記憶の奥底に封じ込めているだけだが 歩美の夢を見る。

それは歩美との何週間、または何ヶ月かに一度の夢での逢瀬だ。

目を閉じ、夢の余韻を追いかける。決して現実では追いつけないが、俺は追いかけることを絶対に止めないだろう。

歩美は陸上の短距離の選手だった。

その日は……その日は陸上の短距離の大会で、歩美のストレッチの手伝いをしている時の夢だった。

歩美は明るい子だった。

歩美が笑っただけで日常で起きる様々な煩わしい出来事を忘れることができた。彼女は俺に一番心地良い居場所を提供してくれる女性だった。

今でも目を閉じれば、歩美の姿を 様々な表情を鮮烈に思い出せる。

たとえ……たとえ、歩美が死んで三年の月日がたったとして

も。

同時に今でも車が人を……歩美を奪った音を覚えている。

歩美は俺の目の前で 死んだ。

手を伸ばせば……少し駆け寄って、手を伸ばせば抱き締められる
距離だった……ッ！

そんな俺の目の前で歩美は交通事故にあった。

俺は歩美を助ける事ができなかった。彼氏面をしながら何も……
何もできなかったッ！ そばに そばにしながら、何も……。

永遠に縮まらないあの距離！

絶たれた歩美との交流、それは冷たい遮断だ。

あの頃の俺はいくら彼女のためでも自分の命を捨てるなんて、出
来るわけではないと思っていた。

だが、今なら言える。

俺の命など、どうでもよかった……どうでもよかったんだ。
歩美が助かるなら……どうでも……

「本当に？」

プロローグ2 悪夢は終わりて現実

その事故は、僕が15歳の時だった。

高速道路での玉突き事故に、家族で乗っていた乗用車が巻き込まれ、大破。

運転席と助手席にいた両親は、正面から衝突した鋼の衝撃に食われた。

僕は……僕のみがひしゃげた車体から抜け出すことに成功した。

無我夢中で歪な檻から抜け出す。頭を打ち、割れた額からは流血視界を遮る血。叩きつけられた衝撃に体が動かない。

車から抜け出した僕は、家族を助けようと四つん這いの姿勢から振り向いたが、動いたが、エンジンに引火し、車体がごうつと猛獣のような唸り声を上げて爆ぜた。

至近距離での爆発に、身体は人形のように翻弄され、路上を転がり、坂になった路面を転がり落ちた。

体を強かに打ちつけ、坂道の上では炎上する火炎の唸りに、残された妹と弟の絶叫が重なる。

助けを呼ぶ声。僕を求める声。苦悶と嗚咽の断末魔。

まだ生きていた妹と弟は、生きながらにして炎に焼かれた。

至近距離で叩きつけられた爆風と事故の衝撃、そして苛む頭痛に昏倒した。

目が覚めるとそこは白い病室で……僕は家族を喪失したことを聞かされた。

正面から衝突した両親は、体を圧死させられ即死。

歪に歪んだ車体に取り残された妹と弟は悲惨だった。絡みついた車体の歪みに身体を縛られ、横転した車は燃え出した。

鋼の車体を少しずつ熱で燃え上がらせ、徐々に妹と弟は、生きながら焼かれて　死んだ。

僕自身も重傷で、骨折二箇所、左額の傷は五針の裂傷。全身打撲。救急車に運搬された時は出血多量のせいでショック死寸前、心停止にまで至った。

三日三晩、生死の境を彷徨い、重度の意識混濁。四日目の明け方に目を覚ました。

そして、僕は事件の後遺症で《眼》をやられた。

15のあの日、僕は家族を喪失し、以来、僕の《眼》には凶が刻まれた。

家族はいない。僕の家族はもうどこにもいない。
残された僕は……この現実……どうすればいい？

僕も　僕も共に……連れて行って欲しかった！　僕だけ独り残されてどうすればいい！？

そんな僕に見舞い客が来た。誰もその存在を知らず、誰にも見えぬ見舞い客。

天涯孤独の僕の両親には、親戚はおるか遠縁のものもない。
見舞い客は黒い喪服のような着物を着ていた。そして僕に言った。

『じふにぢは』と……。

第1章 ALTEREGO

別の自分

あやさきかいり
《綾崎恢梨》

朱ノ宮学園

三階 2年A組

窓側の席

最近俺は憂鬱だ。

いや、いつも変わる事などなく憂鬱だったが、最近は輪をかけて憂鬱だ。

なぜならば……

「ねえ、綾崎君もこっちに来てみんなと一緒に話さない？」

このクラスメイトが俺に何度も話しかけてくるからだ。

目の前で返事を待っているクラスメイトの名を、織原理央^{おりはいつりお}。

わざわざ真中の席から、俺の座っている最後席までやってきて、誘ってくる。

おそらくクラス委員長の立場として、このクラスの担任である北野教諭に頼まれて俺を誘っているに違いない。

すなわち、『クラスの中で孤立している生徒がいたら、声をかけてやれ』……たぶんこんなところだろう？ ご苦労な事だ・

内心で薄く笑う。

そんな上辺だけの団結が何だと言うんだ？

俺には一人の親友がいる。友は彼だけで十分だ。

（体裁を整える今の教師にありがちな教育方針だな……）

しかし……

これで何回目だろうか？ 鬱陶しさが、話しかけられることに蓄積されていく。

（うるさい。邪魔だ。鬱陶しい。話しかけるな）

次々と過激で、攻撃性を含んだ単語がでてくるが、そんなことはおくびにも出さずに無表情を装う。

「別にいい」

何度目になるかわからない同じ単語を同じ抑揚で言う。

だが………気をつけないと俺は織原の誘いに無意識に応じそうになる。

「そつか……うん。じゃあ……また、ね」

あきらかに落胆した様子を見せ、織原は立ち去る。

（またね……だと……？）

織原の言葉を胸で反芻させる。

とんでもないと思った。

ざわめいた感情がそれだけではないと知っていたが、慎重に“それ”から目を背ける。

とにかく、俺は織原が嫌いだ。初めて会った時から。

「……」

違うな。数秒考えてそう思う。

（初めて会った時……俺は嬉しかった……）

もはや読書の意欲が失せていた。

本にしおりを挟むと、窓の外を瞳に映す。

初めて織原にあったのは、去年の入学式の帰宅中のことだ。桜が視界いっぱいに咲き誇っていた時……。

あの事件から二年ほど経った時、織原と偶然目が……合った。

惹きこまれそうだった。ただ呆けたように俺は織原を見た。

久しぶりに、俺は他人に表情を見せたと思う。

押し寄せてくる激情に身を震わす。

声をかけそうになった。

名前を呼びそうになった。

瞳から涙が溢れそうだった。

そして、

なによりも、彼女を抱き締めたかった……！

溢れ出す想いは心臓を甘苦しく急きたてる。

だから、

「あ、あの……」

戸惑う織原の声と表情を認識した瞬間、冷水を浴びたように体が凍った。

（違う……！）

何かを言ってその場を後にした。たぶん謝罪の言葉だろう。

家に帰り、歩美の写真を見た。

歩美と帰宅中に会った少女は似ていた。……いや似ているってものじゃない。酷似していた。

作っていた表情を投げ捨てているほど……似ていた。表情がそれこそ、人目にでてしまうほど。

「彼女が欲しい……側にいて欲しい……！」

激情のまま言って、俺は激しい動揺に襲われた。

「何を言っている！？俺は……俺は何を言っている！？」
信じられないことを口にし、俺は慙愧さんきの表情を浮かべる。

歩美以外の誰にも絶対に言わないと思っていたことを……口にした。

俺は恥じた。歩美以外の誰かを一瞬でも惹かれた自分を恥じた。その日以来、俺は織原を嫌いになった。

遠くから視界に入りそうになると、顔を背けた。見たくはなかった。

とりわけ……顔は……

だが、織原は学校行事などに関係していたため、嫌でも織原を見ることがになる。

まるで人の決心を嘲るかのように……

それから一年後。

二年の新しいクラスを見た時、忌々しげに眉を歪める。

同じクラスだった。

あの織原理央と、同じクラス。

一気に俺の憂鬱が増す。最悪だ。

新学期と言う事もあって、少し弾んでいた心も動きを止めてしま
う。

加えていつの間にか織原の名前を覚えていた自分に嫌悪した。

そして、憂鬱は現在に至る……と言うわけだ。

ようやく鬱陶しい教室から図書室へと移動する。理由は、俺が図書委員だからだ。

図書委員をやっている理由の一つは親友に誘われたということが大きな原因だ。そしてもう一つは、何らかの委員をやって自分の置き場を作っておいた方が、煩わしい教室から離れる事ができて、都合がいい。最後は図書室の静かな環境は素直に嬉しいものだ。

「フハハハハハ！ 本気スか？」

聞きなれた哄笑を聞いて、俺は微笑をもらす。どうも最後の理由は取消しだな……。

親友の放つ哄笑は、扉を閉めていても僅かな隙間からこれでもかと言っほどの音声をもって、飛び出してくる。

図書室の扉を開けると、すぐに親友が反応して、声をかけてくる。
「いらつしゃい！　って何だアーヤかよ」

親友は図書室の入り口の正面にあるカウンターから、居酒屋のような活気のある声をかけてくる。

それから俺の顔を見てニツと笑う。

威嚇するような、それでいて不思議と親しみのある笑顔だ。

「……そのアーヤと言う呼び名はやめろ」

惘然とした表情を作りつつも、内心は表情ほどではない。

しかし綾崎だから、アーヤと言うのは安直すぎる気がしないでもないが……

親友の名前は、羽村直人。はむらなおひと 中学からの親友だ。

野性味な容姿で十分端正な顔立ち……なのだが、鋭い研ぎ澄まされた刃物のような目つきにざんばらに伸ばした髪。そして強烈な個性。

あぐく頭に巻いた白のタオル。それらが、人に妙な威圧感を与えている。

実際、直人は俺よりも4？ほど身長が低いのだが隣に並ぶと、なぜか自分の方が低く感じる。

豪胆で、何がそんなに楽しいのかと言うほど日々を笑って過ごしている……見かけ上は。

そんな……友人だ。

「何だよー、つれねえーな」

直人は少し不満気な顔を浮かべると、何かやつにとって、良いことを思いついたのか、ニヤリと笑う。

「酷い、恢梨ったら！　あの熱い、ときめきの熱い夜を忘れたの！？」

「……知らんな」

オカマ声でウインクを送る直人を冷たくあしらって、俺は直人の隣へと腰掛ける。

「あゝあ、冷たいな」

忍び笑いを喉元で鳴らして、直人は椅子へと体重をかけて寄りかかる。

「最近どうよ？」

語尾を高く上げて尋ねるのは、関西特有のイントネーションだ。いまいち関東出身の俺には馴染みのないものだが……直人に慣らされてしまった。

「別に……無変化だ」

素っ気無い俺の返事に、苦笑を直人は漏らす。
しかしその瞳の奥に潜むのは俺とは別の苦い悲しみだ。

「そつか……まあぼちぼち……な」

「ああ……」

そして、直人は一瞬こちらが声をかけそうなほど苦しげな表情を見せる。

同情なんて、まっぴらだ。

だが、直人だけは……違う。

直人も、俺と歩美のことを知っている一人だ。

当時、歩美が死んだ時、俺の周りの友達は何に同情の言葉を送ってくれた。

その瞬間、彼らとの友情は終わりだ。同情された上で、成り立つ友情なんて有る訳が無い。

俺には彼らの同情の下に隠れた憐憫が見えてならない……俺は……俺は友とは対等でいたい。どうあってもだ。

かけられた彼らの言葉を、俺は頭の中で反芻させる。

『歩美ちゃんは……残念だったな』

『気を落とすなよ』

『元氣、出せよ』

それらの言葉の中で、直人の言葉だけが異質で、そして鮮烈だった。

『殴れよ』

『……？』

一瞬、棒立ちになる俺に、睨みつけるような瞳で直人は続ける。

『俺は自分が幸せになったら、必ずお前と比べちまう。……嫌でもな。俺は自分の汚い部分を知っている』

『なんだよ、優越感か？』

俺は直人に問いかける。

『そうさ……自分の心や思いをコントロールできなくム力つくがな……そんな自分がム力ついて嫌なんだよ！ お前を可哀相なやつだつて、レッテルを張っちまう自分が嫌なんだよ！ 氣にくわねーんだ！ だから、殴れ！』

その勝手さに俺はほとんど反射的に言い返す。

『何だ、ようするにお前は自分が苦しいからだろ？ 自分勝手なんだよ！』

俺は固めた拳を直人の左頬に叩きつける。

叩きつけたと同時に響く直人の怒声。

『何殴ってんだ、コラッ！』

氣が付けば、俺は空を見上げていた。

（何で俺は上を見ているんだ……？）

殴られたと氣が付いたのは、地面に腰をつけていると認識した時だ。

せりあがってくる左頬の痛みというより、灼熱感に、俺は怒りが全身を貫くを感じる。

（殴れとか言っというて何だよ……！）

俺は直人を睨みつける。

直人は俺の視線に平然としながらも、どこか俺を見下すような表情で俺を見据える。

直人は、口の中で出血した血をなれた仕種で、地面へと言葉とともに吐き出す。

『自分が自分のこと考えて、一体何が悪いんだよ？ ああ！？ ど

こが勝手だよ!」

「何……ッ!」

「「何ッ」……じゃねーよ! 気取ってんじゃねーッ!」

「気取っているだ!?!」

何を言っているか分からないという表情の俺に、直人はせせら笑う。

「恋人を亡くしてしまった不幸の主人公……ってさ。お前酔っているんじゃないのか? 《可哀相な俺》……とか言って、よッ!」

言い終わるや否や直人の拳が襲ってくる。

強烈な左右の連撃に、足下が揺らぐ。

「お前なんか何が分かる!?!」

俺は再度直人を殴りつける。

直人は俺に殴られ、その反動で後に少し体を引くと、口の端を吊り上げて冷笑し……

「分かる訳ねーだろうがッ!」

苛烈な怒りとともに直人が俺の右頬に拳を叩きつける。

「心で思っているだけで、伝わると思ってるのか、お前は!?! 口を閉ざして、誰が話しかけても自分の心に入れないお前の気持ちなんだ、誰にもわかんねーんだよッ!」

さらに俺は左頬を殴られる。

「優越感だあ? 舐めんじゃねーぞ、ボケ! 俺に言わせりゃ、自分の辛い事をどうして俺ら友^{ダチ}に言わない? 独りで辛いなら俺らに吐きだしやいいだろうが! 何のための友^{ダチ}だ? 俺らはただ騒ぐだけの存在か? それとも何か? 俺らは《そんな自分の一番大切な事は言えません》、てことか? テメーの方が俺らを、俺を軽く見ているだろうがッ!」

そこからはお互い拳の応酬だ。

俺はやるせない思いを拳とともに、直人に放つ。

小一時間で、俺達は地面に仰向けの状態になる。正確にはならざるえない。

理由は殴り疲れたからだ。

互いの存在を、殴られた痛みと荒らげた呼吸で感じさせられる。

『あゝ、くそ……痛って……』
『……』
『たたく、俺様のハンサム フェイスがよ』

ぶつくさと呟きながら、直人はまだ仰向けのまま地面に寝そべっている俺の方にやってくると、

『おらよ』

乱暴な手つきで、右手を差し出してくる。

『……』

なぜか……なぜか素直に俺はその手を取る事が出来た。

拳と一緒に、心の中のわだかまりを全部吐き出せたからかもしれない。

と、

俺は思いのほか強い力で引っ張られ、身体を持ち上げられる。

戸惑う俺に、額同士がぶつかるほどの至近距離で直人の双眸と向かい合う。

眼前で直人は例の威嚇するような笑みを見せ、それこそ憎いくらいに宣言する。

『羽村直人は綾崎恢梨という存在を親友として必要としている……だからこれからも頼む』

『……全く、お前にはやられるな……』

歩美が死んでから……ようやく初めて俺は人と会話し

笑った。

「……い……おいアーやってば！」

「ん……何だ？」

昔を回想していた俺は、直人の声に意識を戻す。

「大丈夫か？」

「ああ、ちよつと考えごとをしていただけだ」

笑みを含んだ直人の問いかけに、そう答える。

「ふ〜ん……やっぱりアーヤったら、昨日の熱〜い夜の事が忘れられないのねえ〜？」

子供が悪戯をする時によくする笑いを直人は浮かべる。

どうでもいいが、そのおネエ口調は気色が悪すぎる。

（ここは話題を逸らすか……）

そう俺は結論づける。

「そう言えば、最近の居候先ではどうだ……うまくいっているのか？」

「……………」

直人は、去年から世話になっている居候先のことを聞かれると、顔から表情が消失する。

別に直人は、居候先の人たちを嫌悪しているわけじゃない。むしろ……………その逆だ。

だからこそ、直人は悩むのだろう。

我ながら最悪のことを聞いてしまった。

直人は中学の頃に家族を事故で亡くし、自身も重傷を負った。

それ以来、彼は施設を転々とし、直人が高校1年の頃、とある寺院に引き取られて現在に至る。

その寺院の住職には娘が二人いて、直人には義姉と義妹ができた……………そう言うことだ。

一度直人に、直人の義姉妹の事を聞いた時のことだ。

「なぜ、俺を引き取ったか不思議に思った」

蠟ろうのように白い表情。淡々と友人は言葉を紡ぐ。

縁ゆかりもなにもない気難しい十代中盤の子供。そこに住む人たちは優

しかった。俺にはその理由がわからなかった。同情や憐憫は吐き気がした。だが、それとは違う』

その時の友の目は凍りつき、されど溶岩の如く煮え滾っていた。『始めは《家族ごっこ》に吐き気がした。けど、俺が何度拒絶してもあしらっても、あの人は……あの人たちは俺の傍に続けた……』

独白は続く。静謐に滾る友人の声音は、どこか違う誰かのようで

……

『狂犬の俺は何度も彼らの手を噛みついた。それでも彼らは手を差し伸べ続けた。次第に俺は彼らに少しずつ、心を許していった』

ぎしりと噛み締める音が漏れる。

強大な慙愧。溢れ出す嚇怒が、握り締められた拳の震えとなって発露する。

ぞわりと直人の全身に怒りが
いや、これはそんな生易しいものではない。

憎悪……すでに直人の双眸からは、黒い鬼火が燃えている。

『家族になれる……家族だと思った時……俺は知った。俺の両親を奪い、妹と弟を焼き殺し、俺を
俺をこんな“目”に遭わせた張本人上月夏彦（うづつきなつひこ）の残された遠縁にあたるのが、彼らだったと言うことをな……ッ』

絶叫は悲鳴のようにも怒号のようにも聞こえた。

『あの優しさが偽りだったわけじゃない』

慟哭のようにも嘲りのようにも聞こえた。

『彼らに罪はない。だが、俺の家族を奪い、俺の運命を狂わせた血族だということが……その事実を割り切れない……憎むべき相手はすでに亡く、この憎悪を俺は一体誰にぶつければいいッ！』

それは、俺の叫びでもあった。

『大切にしたいと思ったものは、奪われていく。まるで神の掌で弄ばれているみたいだ。運命の不条理を感じた』

渦巻く黒い波音が聞こえる。

引き摺り込まれる奈落の感覚。

『俺は神を信じない。神がいれば、この世はもつと慈悲に溢れているはずだ。俺は奪われ、弄ばされ、神から、幸福から捨てられた私生児だ。何も信じられない。信じた先から、まるで掬い上げた水のように……掴んだものは滑り落ちていく。こんな想いを何度か味あわせる神を、俺は信じない。もしいるならば、どこかで昼寝でもしているんだろうさ』

黒い銅鑼^{ひつ}を鳴らしながら、運命の手は奪い続ける。大切な人たちを……

歩美の顔が思い浮かんだ。

『誰も頼らない。もう大切なものもない。優しい幻想などいりはない。こんな絶望や裏切られた喪失感を繰り返す世界など……俺には耐え切れない』

『すまない。俺自身……どう言ってもいいか分からない……』
そう不器用で稚拙な答えを返すと、

『いや……わかつちやいるんだ。俺がやるべきこと。生き残った俺がしなければならぬこと……全部わかってる。ただ た
だまだ俺はそんなに強くない』

そこで、直人はようやくほんの少しだけ苦味を含まない笑みを見せた。

『未成年^{ガキ}の俺らには……この世界は住みにくいよな……全て切り捨てて生きていけない』

最後に呟いた……その一言が印象的だった。

「家のことはいいから……そんなことより、昨日俺が書いた図書委員のレジメ見直し終わったか？」

避けるように直人は本題に入る。

これ以上、直人の家についてつつこむのは得策ではないので、ここで追及を止める。

「ああ。今日の朝、学校で確認した……あれでいいと思う」

そこで自分の鞆を探るが、レジメが見当たらない事に気が付く。

「ん、どうした？」

「……すまない。教室に忘れたようだ」

背中越しから覗き込むようにしている直人に答える。

「取りにいつてくる」

「付き合おうか？」

「すぐに戻るからいい。カウンターの方を頼む」

正直、教室までの長い廊下を一人で歩くのは気だるかったが、そんな理由で図書委員の役目を放り出すわけには行かない。

「5時にはお家に戻るのよ」

直人の軽口に頬を少し弛ませると教室に向かった。

喧騒は朝の激しいものではなく、耳に心地良い騒音だ。

部活動の最中の生徒達の掛け声が俺の耳を掠めてゆく。

陸上部の部員たちが掛け声を上げて走っている姿が見える。

その風を受けて、息を弾ませる彼らを見て、思い出してしまふ。

歩美は走るのが好きだった。

細くしなやかな体が躍動し、長い亜麻色の髪をそよがせて、風に祝福されたように走るその姿は、どこか触れざる者のように……神聖なものとして俺の瞳に映った。

背中をいつも追いかけていた。

たまに振り返る顔が、俺が後ろにいるかを確認する。

そうして、歩美は背中を向ける。

なぜ走るのが好きかと、問うたことがある。

「気持ちいいからだよ！」

満面の笑み。何でそんな当たり前のことを聞いているのかなという、不思議そうな目。

「しんどい……ただだ、ろ……」

荒れた息の中で搾り出した答え。

『そうかなあ……確かに走り始めはそうだけど、だんだん体の端々が熱くなってきた、気が付いたら疲れが消し飛んで、どんどん楽しくなってるんじゃない?』

『それ……は、ランナース・ハイだ……っ』

全く速度が落ちない。それどころか徐々に加速しだすのは、そういうからくりかと、俺は息を喘がせる。

『へえー、ランナースハイかあ……なるほどなるほど。恢梨は物知りだね、本当』

汗に濡れた額を拭って、歩美は笑う。

『私はね。きつと鳥みたいに空を飛びたいと思うの。けど、羽根がないから飛べないよね。でも代わりに……』

ポンポン、と短パンからスラリとした脚線美を叩いて、にっと笑う。

『脚があるから。私は地を翔ぶんだよ』

そう言って、朝焼けの中、彼女は空を見上げる。

その眼差しと横顔を……俺は生涯忘れない。その時、共にあったことを忘れない。

回想から時計に視線を滑らすと、4時40分とあった。

(余裕だな)

5時までの時間の猶予にそう判断する。

教室に着くと、手早く置き忘れたレジメの書かれたプリントを回収する。

教室には既に人気は無く、すぐに図書室に踵を返す。

「ふう……」

漏れでたため息は、一人のクラスメイトと顔を会わずにすんだ安堵だ。

だが、図書室に入室しようとした瞬間、背中から織原に声をかけられた。

最悪の事態に内心で舌打ちを零す。

振り向いた先の、期待を込めたその表情がうっとおしい。

そこにはやはり織原がいた。

待ち伏せしていたのか、それとも偶然か。

(もうどうでもいい)

残忍に、凶暴なくらいにそう思う。

織原にはつきりと見えるように眉をひそめる。

俺の表情に織原は心配そうな……そんな表情を見せるが、できるだけその顔を見ないように、声をかける。

「ちよつと来てくれますか？」

内心の沸騰が、逆に冷静な口調を紡ぐ。

図書室から離れ、めったに人がこない校舎の別棟の端へと向かった。

「えーと……何なの、かな？」

この辺りに来たことがないのか、織原は周辺を見回して、俺に用件を尋ねてきた。

何回も、織原の誘いを断ったというのに……

(軽く言っても無駄なことか……)

内心の黒い感情を努めて圧殺する。

でないと、それは嘔きだしてしまいそうだった…。

「迷惑なんですよ、話しかけられるのは」

あくまで丁寧な言葉使用だが、強い口調で織原に用件を言う。

何を言われたのか全く判らない。ただ呆けたように織原は俺を見ていた。

その瞬間、圧殺できない感情が爆発した。

「迷惑なんだよ、何度も何度もしつこく誘われるのはッ！俺のことはほっておいてくれ！だいたい俺が織原さんのグループに入る必要性は全くないだろ？とりわけ君のグループに入りたくはない

んだ！ 意味なくツルんで、ギヤアギヤア叫んで、笑って……ッ、
うっとうしいんだ！ 俺に……俺に二度と話しかけるな！」
言い切った後、織原は傍から見てもずっと表情を変えたのが分か
った。

嗜虐的な快感を得るかと思えば、胸に来るのは激しい後悔だ。
そして、織原の目尻から涙が零れ落ちるのを見て、締め付けるほ
ど強烈で痛切な罪悪感を覚える。

「ごめ……ごめん……なさ……い」

絞りだすようにそれだけを言うと、織原はその場から走り去る。

「……」

俺は無言で織原の背を見送る。

（声を……かけなければ良かったんだ）

そんな言い訳めいた言葉が思い浮かぶ。

「……………」

一体どれくらい無言で、俺は立ち尽くしていたんだろうか？
虚ろな視線を腕の時計に向けると、5時23分だった。

第2章 嫌いな理由 1

《綾崎恢梨》

織原が嫌いだ。

いつそ憎んでいると言ってもいい。顔や表情が嫌いだ。

存在そのものを拒絶し、嫌悪……いや、憎悪していると言ってもいい。

何よりも織原の笑顔が嫌いだ。

織原ほど克明こくめいに歩美を思い出させる存在は、視界に入れるだけで不快だ。

声は違う。性格も違う。ただ顔だけが、驚くほど歩美と似ている。そして、不快しか感じるわけがないのに……感じてはいけないのに……わずかに嬉しいと思う自分が、吐き気がするほど嫌悪を覚える。

憂鬱で、死にたい。罪悪で、破壊したい。悲しみから、逃げ出したい。

しかし、それは叶わないだろう。

俺は背負わなければならぬ。苦しまなければならぬ。笑うこ

とも、幸せになることも許されていない。
大切な人を守れなかったのだから……

人気のない校舎の別棟から図書室へと移動する。
すでにかなりの時間が過ぎていた。直人との約束は守れなかった
ようだ……。

早足で図書室へと戻る。人気のない廊下に俺の足跡が響き、なぜ
かどこまでも続く迷宮を彷彿とさせた。

（いや……）
後ろを振り返る。

夕方を過ぎ、陽光の弱まった廊下には暗闇が忍びやかに押し寄せ
て来ていた。ひどく暗く。寒い。

「すでに……俺は迷い込んでいるのかも……」とうの昔から、抜け
出せない……迷宮に……」

ひどい寒気が俺を襲う。腕に痛みを覚えるほどの寒さを感じた。
全身が引き伸ばされるような奇妙な浮遊感……闇に溶け込むよう
に消えるのかと錯覚した。

数分も歩くと、当然のように図書室に辿り着く。図書室の窓から
廊下へともれる光が、俺を少し安堵させた。

「遅えーよ！」

図書室の入り口の扉を開くと同時に、直人の怒声が飛び込んでき
た。

すでに図書室内に生徒や在席していた教師や司書の姿はなく、直
人と俺の二人だけのようだ。

乱れた椅子や、放置された本などはすでに片付けられ、本の貸し
出しと返却を行うカウンターには、完成されたレジメがファイルを
開いた状態で閉じられているのが確認できた。

全て、直人がやったのだろう。大雑把で豪快。粗暴な言動ように見えて、それと対照的に神経質で繊細な性格をしている。そして与えられた仕事は常に完璧に近い形でやり遂げる。

扱いやすいように見えて、その実、ひどく掴みづらい。

きつとそれは、家族を失ったこと。そして預けられていた施設でのことや今の居候先が深く関係しているのだろう……大抵のことはあけすけに物を言う直人が、このことだけは口を閉ざす。

憎悪で燃えた瞳で、直人はその時の境遇を語ったことが思い出される。

俺が歩美を失った時と、また違う陰惨な感情の嘆き……噎び、世界と運命を呪い、自分を蔑み、憎悪で固く鎧うしかなかった時を、直人も俺と同じく経験している……たまに見せる、直人らしくない言動と性格の統合の歪みが、それを俺に教える。

違うのは、過去の呪縛と悔恨に囚われ、前に進めず、後ろを振り返ることしかできない俺と違い、直人は過去に囚われず、彼の名前通り、真っ直ぐ前に進んでいることだろう。

その強さはどこからくるのだろう。

同じ位置にいたはずの友人は、たった数年で遙か先でふてぶてしい笑みを浮かべて俺を待っている。

そう言えば……直人が自分自身のことを「僕」ではなく、「俺」へと変わったのはいつの頃だったか……子供が大人になるように、直人は人よりも早く変貌していった。

「ぼけーっと突っ立ってないで、手伝わたらどーなんだよ？」

直人の少し苛ついた声に我に返る。

「……ああ」

「恢梨……？」

僅かな俺の戸惑いを察したのか、直人は本棚に本を収納していた作業を止めて、俺を探るように見る。

陽気さと少しの傲慢。そして自信に溢れた直人の瞳が、ずっと色を失い、伶俐な光が代わりに、輝きを灯す。

酷く老成した瞳。

それは重大な秘め事を知っているかのようなのだ。いつもの陽気な男が見せる、もう一つの冷静な顔。その表情は、まるでいつもの陽気さが演技だと錯覚してしまいそうになる。

いや……事実、演技なのかもしれない……

こいつはよく笑う。機嫌よさそうに応じる。

だが、今のこいつを見たら皆、混乱する。

多重人格とか、そういうふざけた答えではない。こいつは見せない、踏み込ませない。

人付き合いのよい仮面を装い、そうとは知れずに人を寄せ付けないのだ。

俺とは違うやり方と表情で、こいつは誰も彼も拒絶するのだ。

「どうした？」

短いが、直人は核心に迫る問いを俺に投げる。

「別に……何でもない……」

「お前何かあった時、絶対に『別に』って言うてから、視線を逸らすよな……昔から……」

直人から視線を逸らしながら答えた俺に、直人は軽い憤激が生まれるほどの冷静で正確な指摘を送る。

「詮索はウザいか？」
せんさく

俺を追い詰めるような問いを発しながらも、直人の瞳には痛みを忍ばせている。

それを拒絶できるわけがない。

だが、織原のことを口に出すわけにはいかない。

口にすれば、この親友はおそらくどんなことをしても、織原を俺から排除し、俺を守ろうとするだろう。

馬鹿のように全力で、愚かなくらい感情的に……憧れるくらいに真っ直ぐに……

たとえば直人が困っていれば、俺はそこまでできるだろうか？
(できはしない……)

そんなに俺は善人じゃない。

助けたいと思う。

だが、思うことと、実際にそれを実行できることは話が別だ。

こいつはするだろう……してくれるだろう。

こいつはどこか壊れている。痛覚の感覚が人より優れすぎている。

こいつは痛いのだ。

自分の大切な人間が傷ついている所を見るのが、痛くて痛くて、その痛みには耐えられないのだ。

だから、平気で自分を犠牲にできる。罪を重ねても平気なのだ。

羽村直人という男の行動理念と状況が一致すれば、こいつは想像を超える爆発力を持って障害を排除するまで止まらない。

故にその前に、止める。

「そんな顔するなよ」

苦渋を滲にじました直人の台詞に、俺は無意識に俯にじいていたらしく、顔を上げて直人を見る。

「……」

沈黙する俺に、直人は軽く息を吐き出し「仕方ねえな」と呟く。

そして例の威嚇するような、実にこいつらしい笑みを浮かべた。

「いつでも話してくれ。俺は待つし、協力する」

苦笑せざるおえない。

俺の嘘と偽りは容易に見抜かれている。

それでも、直人はその嘘に騙されたふりをしてくれた。追求せず
にいてくれる。こんな細やかな配慮の出来る人間が粗暴だと？

周りは容易く騙されている。

こいつも、そして俺も孤高の城を築き上げるのだ。

城壁を築き、城門を堅く閉め、誰も彼も入らないようにする。中
身のない城を守っている。

「ああ……いつか話す……」

結局、俺はそんなずるい答えしか、直人に返せなかった……。

第2章 嫌いな理由 2

数日が過ぎた。

月日に関する……いや、世の中全てが色を失い、曖昧だ。

6限目の授業が終了し、今、2年A組ではHRホームルームが行われていた。

簡単な明日の予定などが教師の口から伝えられ、HRの後に、クラス委員長である織原が立ち上がって言った。

「ごめん、みんな。ちよつと報告したいことがあるんだけど……い
いかな？」

よく通るはつきりとした口調が発せられると、喧騒に包まれていた教室が静かになる。

織原に視線を向けるクラスメイトと違い、視線を織原から逸らし、窓から見える景色に視線を固定させる。

「えーとね……5月に園外学習えんそくがあるのは知ってるよね？ 各クラスの行きたいところを今週中に決めなきゃいけないんだけど……みんなどこか行きたいところある？」

おそらく、手元に持っていた資料を読み上げていた織原の声が聞こえる。

織原の質問と同時に、また教室は歓声混じりの喧騒に包まれる。

元気なことだ……。

ひどく、この教室に俺の居場所はなかった。俺にとって授業のない教室は、他人が集まる騒がしい場所にすぎない。

軽いため息をつく。

結局のところ数十分に及んで、行き先は隣街の山にあるキャンプ場ということになった。

跳ねる鼓動は、行き先を知っていた。……………そこは歩美と最後に出かけた場所だ。
思い出が蘇る。

『ほらほら！ 恢梨！ 早く早く！ 私の手料理のカレーを食べたくないのかー！？』

緑溢れる山間に、元気すぎるほど活力に満ち溢れた歩美の声が木霊する。

『やれやれ…………』

米をはじめ、野菜や調理器具を背負わされた俺の背中では悲鳴を零している。

足を痛めないように、ゆっくりと確実に山に登る俺にじれたのか、転げるような勢いで歩美は高みから降りてくると、俺の背後へと回り、ぐいぐいとリック越しに背を押してくる。

『早く！ 早く！』

『待て。危ない。冷静になれ』

『べらぼうめえい！』

押し留める声に歩美は一喝。一層、押す力が強まった。

『山が私を呼んでるんだよ！？ 恢梨にも聞こえるでしょ！？』

『全く聞こえん』

『考えるな、感じるんだ！』

『無茶苦茶だ』

だが、どうしようもなく笑いが込み上げてくる。

本当に無茶苦茶すぎて、君につられてこっちまで楽しくなる。

（だが……………今は……………）
微笑を刻む思い出も、最後の事故の悲しみに、遠い過去に追いやられてしまつ……………

瞳を閉じた。

「じゃあ、班を決めるから、みんな適当に班を作って、班長を決めてから、私に報告して下さい」

瞳を閉じた闇の中から、織原の声が聞こえた。

織原の言葉の内容を聞いて苦笑をかみ殺した。

（俺にはこの教室に友と呼べるものはいないな……）

親友である直人は隣のクラスで、今の俺は孤立無援と言うところだ。

このような状態にある原因は、俺の人付き合いの悪さの一言につきるだろう。

そして、クラスの中で唯一差し伸べられた織原の手も俺は拒絶した。……そう、俺は彼女の手だけは絶対に拒絶せねばならない。どうあっても、何がなんでも、だ。

それに、差し伸べられた手も……所詮は担任の指示かもしれないがな……

（いや……）

そちらの方が、俺はありがたい。

義務感や立場的な役割から生まれた好意ならば、容易に御することが出来る。

そんなことより怖いのは、もっと怖いのは何の打算もなく差し伸べられた手だ。

やがて、俺を残して、班が決められていく。

そして、織原は担任の許に記入された班の報告に行く際に、小さく担任に耳打ちする。

おそらく、一人まだ決まっていけない俺のことを話しているのだろう……僅かな罪悪感が胸をかき乱した。

「綾崎」

「はい」

担任の呼びかけに担任の方に視線を向ける。

どうやら、俺の処遇が決まったようだ。まるで牢獄に入れられた

咎人のような心境に皮肉げ思う。

そうクラスという牢獄の中で、俺という咎人は無表情に佇む。そして、それは間違っていない。

人付き合いの悪い異分子。誰にも心を広かない男。

このクラスで人付き合いを拒絶している俺は、それだけで罪深いのだろう。

誰も彼も俺を遠巻きに見詰めている。

俺なんぞに興味なくせに、俺の内心を思おうとしなくせに、ただこいつらは知りたいのだ。好奇心、話の種？

まるで動物園の猿にでもなった気分。

だが、俺は餌が欲しくてねだることなどしない。

だから、仮面をつける。仮面で鎧い、無表情で佇む。誰も俺に踏み込ませはしない。俺の *Alter ego* 別の自分

「織原の班が一人空いているそうだ。そこに入りなさい」

「はい」

瞬間、嘘だとわかる。

織原はこのクラスの人気者だ。それは織原の容姿、性格が裏付けている。

その彼女の班が一人として人数が空くなどという事になるわけがない。おそらく、事前に担任と織原の間で話し合いがあったのだろう。

（ご苦労なことだ……）

内心で薄く笑いながらも肯定の返事を返す。

ひどくこの茶番が滑稽で馬鹿らしかった。今すぐ高笑いしたい衝動に駆られるが、驚くほどそれは俺の心に沈殿していった。

感情を殺す術に、俺は長けていった。望む望まないと関わらず、激情をすぐに収められる。内に中に底に。

だが、緩やかに沈殿する。

まるでそれは穢れた雪。乱れ、捻じれ、狂い、悪臭を放ち、吠えずる。鬱陶しさ。

これが溢れて、俺の心が決壊した時、たぶん、俺は死ぬのだろう。
この鬱陶しさが溢れた時、断言してもいい。俺は 死ぬ。

きつと、あまりにも鬱陶しくて、生きることが嫌になっているだろうから……

「じゃあ、解散だ。班で園外学習までに、役割を決めて表を作り、
織原に提出しなさい。以上だ」

担任の指示と共に、教室は園外学習のことを話題に騒がしくなる。
手早く教科書などを鞆に入れると、教室から出て廊下へと移動する。

と。

「あ、あの……綾崎君……」

戸惑いを含んだ織原の声に振り向く。

声と同様、複雑な表情をした織原が教室から廊下まで俺を追って
来ていた。

「……何か？」

「あの……そのね。何と言うか……」

「……」

はつきりしない織原の態度に別に言うことはなく沈黙で待機する。

「班のことなんだけど……」

そう織原は、ようやく用件を口にだした。

「で、それで……役割のことなんだけど……」

「好きにしてくれ」

説明をしようとする織原の言葉を、俺はあっさりと遮る。

そもそも俺は初めから園外学習に出る気などない。

園外学習の日、おそらく、俺はたまたま“風邪”をひくことにな
るだろう。よって園外学習は欠席となる。

だから園外学習などどうでもいい。

「それと……」

狡猾に周囲を確認。

俺の拒否の言葉に固まっている織原に、廊下を歩く他の生徒たち

に聞こえないくらい音量で悪意の囁きを投げつける。

「言ったと思うが、俺に二度と話しかけるな」

凍らせた視線で織原を見すえる。

「あ……」

俺の言葉に織原は短い呟きと、歪んだ悲しみの表情を表に出す。

と、ハハハハハ。なんだよ、これは。

黒い快感が俺を包み込む。

俺は知っている。今、織原はクラス委員長として義務で、俺と接触してきたことを。

校舎の別棟の端で俺に言われた言葉を覚えていることも知っている。知っていて、俺はわざと言っている。

なぜ？

もちろん、織原を傷つけるためだ。

織原はわかっていているだろう。それなのに俺はわざわざ言葉にだす。必要以上に彼女を傷つける言葉を吐く。

どうして？

それは、ただ単純に彼女を傷つけたいからだ。

とにかく目の前の織原を傷つけたくてしょうがない。黒い俺が突き動かして止まらない。俺がつけた傷を痛がる彼女を見たくてしょうがない。

「あ……ごめ……」

謝罪の言葉を出そうとする織原に背を向けて、彼女を無視して帰路についた。

そうでなければ、黒い俺を止めることなどできはしない。

（最低だ……）

帰宅中、ずっと……その言葉が俺の中で暴れていた。

第2章 嫌いな理由 3

広い部屋だ。

そう感じるのは家族が不在だからだろうか？ それとも夕刻のせいで薄暗い室内の様子からだろうか？

きつとおそらくその両方だろう。

大きな窓のあるリビングへと歩を進める。

夕方特有の燃えるような日光と言うよりは、残光が部屋に射し込んでいる。リビングの壁に貼りつけられた時計の音が、静まった部屋にやけに大きく響いた。

そんなことに気がつくのは、寂しいと思っているからなのだろうか？

脹れあがるのは意味を求めても仕方のない疑問だけだ。そして、それはやがて泡のように消えるのを経験上、知っていた。

本来、夕刻と言う時間には、必ず誰かいるであろうリビングには、俺以外には誰もいない。

理由は、この家に俺の家族はいないからだ。

別に死別しているわけではない。両親と妹は、仕事のためにニューヨークにいる。だから、この家には俺しかない。

両親にも、一人で日本に残るよりも、一緒にニューヨークに行こうと言われたのだが、色々と適当な理由をつけて断った。

なぜ、一人だけ日本に残った、と聞かれたら、返事に窮する。^{いそが}が、

結局、答える答えないは別として、思い当たるのは、一人の少女

歩美の存在が、俺を日本に留まらせた。

それは、感覚としてわかる。思い出す

歩美を。

『恢梨!』

とても澄んだ、突き抜けるような活力に溢れた声。

『なんだ、歩美?』

『なんだじゃない! あんたはなんでそうなの?』

『そうとはなんだ?』

『びー、くーる!』

『Be coolと言われてもな……』

振り向いた俺に突きつけられる右手の人差し指。

その指先と歩美の視線の鋭さに僅かに鼻白む。それを認めるのが癢で、俺は吐き捨てるように答えた。

『馬鹿に馬鹿と言っただけだ。いい加減、わずらわしい』

これ見よがしに語尾に溜息を落とす俺に、彼女は両手に腰をやつて仁王立ちする。

『あのね、恢梨みたいに頭も良くて何でもできる人間に、冷然とそう言われたら、傷つくんだよ!』

『別に何でもできるわけじゃない……と言っか、そういうものなのか?』

『そうなのです!』

『ふむ……だが、どうでもいいだろう? たかだかテストの点数でどちらが総得点数が高いか勝負を持ちかけたのは向こうだ。俺はどうでもよかった。それで負けて、逆恨みされてもな、正直、手に負えない』

クラスでやたらと自分の優秀さを証明する自己顕示欲の強い人間がいる。ことあるごとに俺に絡んでくる同級生は、俺にとって煩わしいことこの上ない。

『それはわかってるよ。でもね、恢梨』

そんな心配したような悲しい表情をするのは、卑怯だと思う。

『それでもね、恢梨には、もっと人の気持ちをわかるような……そんな人になって欲しいな』

真摯な口調と瞳。

『それは命令か』

無然と返す。

『うっん。お願い』

『……………善処する』

『うん！』

無茶で筋の通らない一方的な要求。

それが少し悔しくて、それでも最後の笑顔を裏切れずに承諾する自分が……決して嫌いじゃなかった。

今日も食欲はなく、暗い部屋で黙々と学校の予習と復習をする。

場合によれば、課題に取り組む。学習をするのは単純に2つの理由

1つは一人暮らしをしている息子の成績が優秀ならば、取り合えず両親は安心するだろう。

もう1つは、そう……とても単純な理由だ。それは笑ってしまうくらい単純すぎて声に出して思わず笑ってしまう。

「暇つぶしになるからだ……」

予習範囲の最後の数式を解き終えて独白する。

軽く苦笑しながら、最近すっかり、独白が板についてきたと思う。直人から教わり、今や習慣になりつつある煙草を机から取り出す。ヘビースモーカーの直人が見れば、吸っていて意味があるのかと勘繰りたくなるほど、タールもニコチンも極端に少ない煙草だ。

部屋の窓を少し開け、銜えた煙草の先端に火をつける。

数瞬して、燃え移ったことを示すように、煙草の先端から薄く濁った白いもやが出る。吸い込み、深呼吸に近い形で、吐き出す。それを幾度かくり返して、終わる。

ただそれだけが、この煙草を吸うと言う行為の全てだ。

無意味な行為と断定する者も多いし、健康に悪いと言う者も同じだけ多いだろう。

あなたはなぜ吸うのですかと聞かれれば、正直、部屋の沈黙を持て余しているからとしか答えようがない。

何かをすることで、就寝までの時間を潰すためだとしか言いようがない。

することは何もない。

しようと思う、気力さえない。

何もない。

いつそ笑い出してしまうくらい、やりたいことがない。ここ数年、俺は文字通り生きていたただけだ。

なぜ俺は生きているのだろう。ぞっとするような恐怖とともに日々思う。

何かを成すわけでもなく、ただ日々を浪費している。ただ呼吸するだけのモノ。

目標などない。一体、何を目標にするのだ？

俺の時は、もう止まってしまった。あの時に、彼女が死んだ時に根こそぎ全てを奪われてしまった。

生きたいという気持ちも、愛する気持ちも、誰かへの思いやりも、感情が死んだ。決定的に、俺は欠けてしまった。ひび割れ、割れて、砕かれた。

次の生きがいを見つけると人は言う。

冗談じゃない。俺の愛した女は歩美だけだ。他に人を愛しろ？ふざけている。

浮かんだ一つの面影を、頭を振って消し飛ばす。

腐った目つきで、瞳に何も映さず、ただ灰になった煙草の先を見つめる。

短くなった煙草を灰皿に押しつぶす。

これで、ただでさえ少ないやることが、1つなくなった。

崩れ落ちたまま、俺は有意義を拾えない。組み立てられない。ただ、崩れ、壊れた有意義を眺めているだけだ……

わずかに天井に漂う紫煙を眺めていた、それが消えるまで、ずっと……

いつも通りの朝だった。

天候は晴れていた。だが、それはどうでもいい事だ。晴れならば、普通に登校すればいいし、雨なら傘を差していけばいい。ただ、それだけのことだ。

学校へ行く。朝食は取らない。空腹はあるが、食欲はないからだ。どうせ、昼しか食事を取らない。食べるという行為がわずらわしい。喉の渇きだけを覚え、冷蔵庫のミネラルウォーターだけをコップ一杯だけ飲む。

飲むという行為は好きだ。租借という煩わしさを置き去りにできる。

ウイダー・インゼリー・エネルギー……よく歩美がマラソン後に飲んでいた。それが理由なんだろう。ゼリー飲料が俺の食事だ。

制服に着替え、玄関を開け、鍵をしめて、学校に向う。

通学の途中で、俺はまた表情を動かすことになった。

最近、無表情が常の俺の仮面がよく崩れるが、今回は崩れて当然だった。

視界の先には、黒い猫の死体があったからだ。

死体と断定したのは、アスファルトの血痕や全く動く気配を見せない猫の体を見て判断した。

ただの猫の死体ならば、こんなにも驚きもしなかったし、怒りも

感じなかっただろう。

だが……だが、それが交通事故による死なら、話は別だ！

交通事故というのは、タイヤの急ブレーキの跡、くの字に折れ曲がった不自然な猫の死体から、容易に判断することができた。

（殺してやりたい……！）

思わずついて出る、その情念。

躊躇なく轢き逃げしたヤツを心底そう思った。歩美を轢いたヤツも轢き逃げをした。

許せるわけがなかった。許せるわけが……！

拳を握り締める。

そして、何より許せないのは、歩美の誰よりも近くにいたのに、何もできなかった自分自身だ！

一時期は殺そうという感情を抱き続けたことがあった。

許せるわけがない。人を一人撥ね殺して、そして逃げるその神経。ろくでもないゴミのすることだ。そんなゴミを殺すことに何を躊躇することがあるだろうか？ こんな罪を犯したゴミなど、また同じことを繰り返して外道なことをするに違いない。

司法より早く、俺が裁く。俺が殺す。

この殺意に身を委ねている間、俺は悲しみを忘れられた。

黒い炎が燃えている間は、青い慟哭を無視できた。

けれど、逃げても逃げても、逃げられない。青い慟哭は獵犬となつて俺を追い立てる。責めて喰らいつく。

そう、何よりも俺は俺自身が一番許せない。

俺は目の前にいた。彼女を誰よりも救える距離にしながら、救えなかった。

暴力的なブレーキ音。静止したかのような世界。

体が動いた時には、速度が増して、世界の停止がとける。

跳ね飛ばされる音。衝突する音。

薄暗い雨空。冷たい雨の中、ああ、あれは何だろう。
冗談のように大量の血。
アスファルトに横たわる腕が見えて

耳鳴りの音。

世界が白い光りで失明したかのよう。世界が静寂に満ちて、俺は一人。

穏やかに静かで停滞した世界の安らぎ。
ドクン。

自分の心臓の音が聞こえた。鼓動が高鳴る。体が燃えるように熱くなる。脈拍が上がるのがわかった。

まるでそんな安らぎを認めぬと、拒絶するかのよう……

歩美を連想させるものが目の前にあると、俺はいつも激しい感情が混合したような、想いを感じる。

怒り。愛しさ。切なさ。憎しみ。悔恨。そして、虚脱と絶望に腐食していく。

それらを制御できずに、脹れあがる想いは、心臓に痛みをもたらす。

まるで、あの時の事故で、俺の心臓は致命的な欠陥が生まれてしまったみたいだ。

「うわー、可哀想……猫死んでるよー」

内心の想いに埋没していた俺は、その声に我に返る。

同じ高校の女生徒の二人組みが、猫を見て、可哀想だの、何だの言っと、何事もなかったように、他の雑談に移り、笑いながら、高校へ歩みを進める。何事もなかったように……

俺は暗い笑いがこみ上げてくるのを感じた。

（可哀想？）

誰かに尋ねるように胸中で呟く。喉元で声を出さないように、俺は笑った。

そして……静かに弾けた。

あくまで表情に出さずに、無表情で。けれど、心の中は表情と反対に、荒れ狂ってた。

（可哀想？ 可哀想だと！？ ふざけるなよ。そう思うなら、なぜ猫を埋めようとししない？ 可哀想だと言った数秒後に、なぜ笑える？）

答えは簡単、あの女生徒が鈍感だからだ。

優しさや命の尊さを知らないで、今の現状に何の感謝もないからだ。今ある全てを当然と思い、自分以外の他に何も関心を払わないからだ。

俺もそうだろう。

しかし！ 今、目の前にあるものを素通りするほど、俺は心が死んでいるわけではない。

猫を胸元に抱き上げた。

凄惨な猫の死相が瞳に映り、記憶となり、俺の脳裏に焼き付けられる。

血が服に付着するとか、死体だからとか、常識的じゃないかもしれないだとか、学校に遅刻するだとか、そんなことは俺にはどうでもいいことだ。

今、俺を突き動かす感情が全てだ。

これを否定するならば、俺は今すぐ死ぬべきだ。

だが、俺は人目を気にする必要があったかもしれない。気にしていれば、出逢うことはなかったのに……

第2章 嫌いな理由 4

俺はいつもと違い、感情的だった。

車に轢かれた猫を見て、女生徒の心のない台詞を聞いて怒りがこみ上げてきた。

正確には怒りではないのかもしれない。この熱く、激しい制御で
きない感情……

この感情を無視することはできなかった。そして、するべきではないと思った。

通り過ぎる生徒達や通行人達が、猫の死体を抱きかかえる俺を奇異な視線で見てるが、やはりどうでもいいことだ。

手近な公園に入ると、運良く、砂場に置き忘れたプラスチック製の赤いスコップがあった。

それを借りると、園内で一番高く大きい桜の木へと近づき、隣に猫を横たえ、木の根元を掘り始めた。

プラスチック製のせいか、なかなか土を掘り返せず、労力を必要とした。汗をかき、猫の血の付着したブレザーを脱ぎ、その辺に放り投げる。

猫を埋める十分な空間を取り、猫を静かに横たえる。丁寧に掘り起こした土をかぶせ、埋葬する。猫の埋めた軟らかい土を、強く手で押し固める。

近くに備えられた手洗い場で、手とスコップに付着した汚れを洗い、スコップを砂場に戻して埋葬したせいで少し盛り上がった土を見る。

唐突に不快な感情に襲われた。

それは、俺が一番嫌いな感情だ。払っても、払っても、それは俺

の心に纏わりついて離れない。亡霊のように……。

目が内奥から吸い込まれるように熱を感じ、視覚が歪む。心臓が痛い。

フラッシュバックのように、次々と脳裏を駆け巡る数々の思い出。感情の揺らぎ。

それは、俺の脳を心を際限なく洪水のような激しさで襲う。

（もう嫌だ……こんな想いは嫌だ！）

車は慌てたように背を向け、罪を置き去りに逃げた。

ナンバーを見ることすら頭になかった。ただ俺はその場に呆然と立ち続け、夢遊病のような足取りで彼女へと……血の中の彼女へと……記憶が白濁して

「綾崎君……」

どこか遠くで耳に何か聞こえ、後ろを振り向き

涙で歪む

視界の中で一人の少女を捉える。

「歩……美……」

そこに……目の前にいる少女を見て切なに呟く。

信じられないほどの歓喜が、俺の中で漣なみのように広がり、体を震わす。

次の瞬間、少女を抱き締めていた。

いや、それは拘束だった。

ただ俺にあるのは、今、腕の中にいる少女を離したくなかった。もう二度と離したくなかった。彼女の体温と存在を二度と喪失したくなかった。

ただ、冷えていくしかない冷たい歩美の体温を否定したかった。

無力な自分を忘れたかった。記憶がバラバラになり、無くしたという事実を認められずに、叫ぶ感情を、夢だと思ったかった。全て、俺の悪夢だと言って欲しかったッ！

大切なものを喪失してしまうのを、ただ見ているだけの自分！感情がひしゃげる。暗く沈む。穴を穿^{うが}つほどの悲しみ。助けを叫ぶほどの絶望。

絶望。絶望！ 絶望！！ 今望む全てが絶たれた時に感じる、どこまでも、ただ落ちていく奈落の……あの想い。

あんな想いは二度としたくない。もう二度と……したくない。もう、いけないでくれ！ いけないでくれ……どこもいけないでくれ。頼……む……俺のそばに……いて……くれ。そばにいてくれ」

こみ上げてくる涙が頬を濡らす。それを気に留めず、俺は彼女を抱き締める。

「あ。あの……あ、綾崎君！？」

そして 俺は凍る。

少女の声を聞いた瞬間、心も体も、縋^{すが}りついた想いすらも、全て凍る。何もかも……

織原だった。

また、織原だった。

そして、俺はまたこの現実に戻ってきたのだと理解する。

死ぬ以外に、もう何も残っていない現実に帰ってきたと……

断りもなく相手の了解もないまま変質者のように、織原を抱き締めていた腕を離す。

（いつからだろうか？ 他人や自分にすら興味を持たないはずの俺が、声だけで彼女と特定できるようになったのは？）

今もまだ、涙のせいで、歪んで見える視界に映る少女を見て、俺は思う。

（いつから声だけで、俺は判断できるようになった？）

すなわち 織原理央、と。

……その事実が俺をひどく驚かせる。

強い風が吹き、俺の涙の雫をさらう。

視界が明瞭になり、織原の恥らうような表情を見た瞬間、先刻まで織原へとおよんでいた行為を思い出し、非常に失敗したと思った。

「あ、あの……」

「すまなかった」

織原が何かを言い出すよりも早く頭を深く深く下げて謝罪する。

「え！ あ、いや！ その……いいよ、別に！ その……」

織原は慌てて、両手を激しく左右に振る。

織原の右手のスコップもそれに応じて、揺れた。スコップを持ってきたのを見ると、織原も俺と同じく猫を埋葬しに来たのだろうか？

その疑問を考えると、俺は……

認識できない想いに心がざわめく。それは決して不快ではない。

けれど、湧き出た想いを確かめようとすると、それは心の奥へと逃げて行く。

その徒労感に顔を伏せる。瞬きをする、また目尻から、涙の残滓^{んし}が頬を濡らした。

みつともなく、もうすぐ十七になろうというのに、取り乱して泣いている自分が、ひどく滑稽^{こっけい}に思えた。

そして、二度も歩美と織原を間違った自分を、汚い“本当の馬鹿”だと思った。

かつての恋人^{歩美}だった少女と一恋人に似ているだけのクラスメイト《織原理央》。間違う自分が許せなかった。こんな俺だから、歩美を助けることができなかったんだ。深く自覚する。

同時に目の前の織原が気に入らない
いや、嫌いなわけが
今はつきりとわかった。

織原は、俺を“本当の馬鹿”にするからだ。俺を汚い人間にするからだ。

歩美を忘れさず、存在だからだ。

（遠ざけねばならない）

何よりも強く思う。

「偽善行為をしている俺を遠くから見物か？ 織原さんはすごく暇なんだな」

言った。

驚くほど皮肉げに。織原も、自分と同じように猫を埋葬しに来たと知っていたいながら。

「そ、そんな！？ 違うよ！ 私は……」

「言つたろ？ 俺に構わないでくれと」

織原の言葉を無理矢理遮って、俺は続ける。

「今だつてわかつただろ…… 織原さんに意味なく抱きつく“本当の馬鹿”なんだよ、俺は……」

「……」

沈黙した織原に話は終わったと彼女の横を通り過ぎようとした時、強く左腕を掴まれた。

「……して」

「？」

振り返る俺に、織原は言葉を叩きつけてくる。

「じゃあ、どうしてそんな顔をするの！？ どうしてそんな寂しい瞳でいるの、君は！？ どうしてそんな瞳で私を見るの！？」

「…… 織原さんには関係がない」

織原の激しさに一瞬飲まれ、動揺する。

「それに…… 歩美…… さんって？」

灼熱が脹れあがり爆発する。理性でなく感情が俺を指先まで支配する。

「お前には関係ないと言っているだろッ！ 黙れ！ そして、二度と……二度とその名を口にするな！」

織原に掴まれた腕を、力任せに振り払い俺は叫ぶ。

「訳知り顔で、俺の中に入ってくるな！ お前、何様だ！？」

心を覗かれ、知られることに恐怖する。それ故に、俺は怒りをぶつけた。

「訳知り顔って……私は何もわからないよ！ 綾崎君の何も知らないよ！ 教えてくれもしないじゃない！」

「話す必要がないからだ。教える必要？ お前と俺はどこまでも他人だ。そんなお前にどうして俺が自分のことを話す必要がある？」

こいつを遠ざけたい。近寄って欲しくない。怒りで恐怖で、俺はこいつを……！

「どうして……どう……して、そんな……」

不意に織原の声が途切れる。

俯いた顔が上がった時、織原は泣いていた。瞳から溢れる雫が罪悪を加速させる。

だが、それがどうだと言うんだ！ 俺には関係はない！

「私は……ただ君と仲良^{きみ}くしたいだけなのに……！」

織原は涙で光る瞳で、俺を見つめて走り去る……。

「それが……迷惑なんだよ……」

走り去る背中に、そう俺は言う。だが、それは織原に聞こえるわけがなかったし、力もなかった。

織原を傷つけ、俺は自由になった。

愚かな自分と対面することも、これからはないだろう。全てが俺の思い通りにいった……このうえなく……

「……うまくいったはずなのに、何だよ……ッ！」

この胸に渦巻く、焦燥は何なんだ！？

俺は一体、何を、何を……何を……後悔しているんだ！？

第3章 戸惑いの理由 1

《織原理央》 おじはのりお

私は綾崎君のことが気になる。

いつそ意識していると言ってもいいかもしれない。わずかな表情の揺らぎや、彼の身に纏う暗い雰囲気気になる。

彼自身の存在が、私の日常を少しずつ変えていく。

綾崎君の過去が気になる……

どうして、あんな寂しい瞳で私を見るの？

どうして、そんな苦しそうな顔で私から目をそむけるの？

どうして……私を嫌うんだろう……

彼は何も教えてくれない。踏みこませてくれない。

綾崎君には、クラスの男子と違って、誰よりも固くて見えない壁がある。

ほんの少しでも、彼と話すとわかるんじゃないかな……。彼の硬質で冷たくて、絶対的な壁のことを。

その壁を越えたくて、越えて、中にいる本当の綾崎君と話したくて、私は彼に積極的に話しかけた。

遊びの誘いや、話をしないかと……何度も。……彼の迷惑を考えないで……

（私はなんて馬鹿だったんだろう……）

恥ずかしくなる。

私は自分のことしか考えてなかった。クラス委員長だからなんて、建て前にすぎなかったんだ。

綾崎君のことが、ただ気になっていたんだ。綾崎君が気になる一人の人間として、彼のことを理解したいと思ったんだ。

綾崎君のことなんか考えず、ただの自己満足や好奇心で……

「最低だよ……私……」

自分の部屋で、突き刺さる拒絶の言葉を思い出して、持っているクッションを強く抱き締める。

『迷惑なんだよ、何度も何度もしつこく誘われるのはッ！ 俺の事はほっておいてくれ！ だいたい俺が織原さんのグループに入る必要性は全くないだろ？ とりわけ君のグループに入りたくはないんだ！ 意味なくツルんで、ギャアギャア叫んで、笑って……ッ、うつとしいんだ！ 俺に……俺に二度と話しかけるな！』

溢れ出す情けなさにあの時みたいに、また泣きそうになる。鼻の奥が何かツンとしてきた……泣き虫だな、私……。

私は嫌われていたんだ。もう、ずっと前から……。ううん！ もしかしたら、初めから私は綾崎君に嫌われていたのかもしれない。

「全然、気がつかなかった……」

馬鹿みたいだと思う。彩が『理央はぬけいてるところあるわよね』って笑っていたけど、ほんとその通りだよ。

自分のしていたことが、全部裏目に出ていたなんて……

運命の神様がいるなら、絶対残酷だよ。

もう、とにかく自分のまぬけさ加減が嫌になる。もう少し、ほんの少しでも上手くできてれば、綾崎君とちゃんと話せたかも知れない。

かったのに……

「そしたら……仲良くなれたのかな……」

また、希望的観測な言葉が私の口から漏れる。叶うはずのない想いが……。

「ダメだよね！」

俯いていた顔を必要以上の勢いで、前へと上げる。

こんなのは私らしくない。

「沈む時もある。嫌な気持ちになることもある。でも、瞳の輝きまで暗くしてはいけない。それは人の精神的な死なのだ」だもんね！

お気に入りの神埼幸人の詩集の一句を口に出して、詠んでみる。

くじけた時や落ち込んだ時に、いつも呟く言葉。

元氣を取り戻せるおまじない。

「さて……と！」

気合を入れるために、自分の両頬を両手でぺちつと叩く。

今日中にやらなければいけないことを考えてみる。

クラス委員長をやっている私は、クラスのみんなに今月の末にある園外学習えんそくのことと班決めについて報告して、担任の先生に提出して、後に行われる委員会でも提出と報告をしなければいけない。

副委員長の山下君……通称山さんに連絡も取っておかないとね。

（あとでケータイに山さんに連絡しないと……）

委員会で渡されたプリントを整理して、ちゃんと読めるように目を通しておく。

園外学習の報告は今週中にすれば、OK。

報告も難しいことじゃないし、問題なのは……班がちゃんと決められるということなんだけど……

「やっぱり、綾崎君かな……」

うちのクラスはまとまりが良くて、班からあぶれる人はいないんだけど……

綾崎君だけは難しいかもしれない……。

委員長をしているせいか、だいたいクラスのグループ構成とかがわかる。班をその構成に従って分けて紙に記入してみる。

するとやっぱり、綾崎君以外のクラスメイトはそれぞれの班に入っているけど、彼だけは孤立しちゃう……

「どうしようかなあ……」

無理矢理他の班に入らせることはできないことでもないけど……

それは無理矢理入れさせられた班の人たちや綾崎君自身も、お互いに何というんだろ……あうう。

「凄い微妙だよなーこれ……」

全員が班の欄に記入されているけど、未だどこにも決まらずに白紙の上でぼつんと孤立している綾崎の字を見てため息を吐いた。

一番ましなのは、私の班に綾崎君を入れることなただけ……

それは……たぶん綾崎君にとって望ましくないことのように思えた。

（じゃあ、私にとっては？）

心で響く声。

私にとっては、それは……

（もしかしたら綾崎君が園外学習のおかげで、クラスに友達ができるかもしれない）

それは建前。本当は……

（綾崎君ともしかしたら仲良くなることができるかもしれない）

そう思うだけで……鼓動が大きく跳ねる。

「先生と相談するしかないよね……」

その鼓動を声に出して認めるのが怖くて、私は現実の問題に目を逸らした。

第3章 戸惑いの理由 2

《織原理央》 おりはらりゅう

不可解すぎで、意味がわからない。罪悪で、いつでも心揺れている。この曖昧な気持ちに答えを出したい。

でも、それは叶うんだろうか？

私は悩む。クラス委員長の立場として……とか……私自身のため

……とか……色々あるけど、

それが……それが本当にとても

大切なことのような気がするから……

「ふう……と」

職員室の前で息をひとつ吐き出す。

手に持つ園外学習えんそくについての書類を持ち直すと、職員室の扉を軽くノックして、扉を開く。

「失礼します」

ことさら職員室にいる先生達が、私を見ているというわけじゃないって事がわかっていているけど、何だか職員室は緊張する。顔つきもちゃんとしてないと、注意されちゃいそうな感じがする。

職員室の左奥にいる担任の先生のもとに早足で向かう。喫煙室から漏れるタバコの匂いがした。

「先生、ちよつといいですか？」

小テストの採点をしていた先生に手元の書類を胸の前に持つてきて声をかける。

「お。織原か。どうした？」

機械的に赤い丸をつけていた先生の右手が止まり、私の方に注意を向ける。

なんととはなしに先生の手元的答案用紙を観察してみると。

（綾崎君のだ……）

その答案は数学の小テストで、几帳面な丁寧な数式が書かれていて、いずれも全て正解だった。

最後の問題は

手。あうう……

最後の問題どころか、私はかなり数学が苦手。難しくて全然わからないけど、几帳面な

数式の列には、問題にてこずった感じが全く無くて、ちよつと尊敬を覚える。

前に綾崎君が授業中、授業の内容を聞かないで窓の外を見ていた時、化学の先生に抜き打ちで当てられたことがあった。

その時、綾崎君は、少し手元の教科書と黒板を少し見つめると、すぐに答えを出した。

それが癪に障ったのか、以来、化学の古畑先生は、何度も不意打ちのように綾崎君を当てるのだけど、その質問の全てをまるで回答でも持っているかのように答える。

その上、

『先生、その公式間違っていますよ』

そう綾崎君に冷静に指摘された時の、古畑先生の顔は………その……怖かった。

「織原？」

「あ、はい！ すいません！」

回想していた私は先生の声に現実慌てて戻ってくる。うああ、恥ずかしいなあもう！

「いや、構わんが。なんだ？」

苦笑しながらうながす先生に、

「えーとですね……今度の園外学習についてなんですけど……」

手元の資料を先生の机に一言断ってから広げると、担任の先生に近いうちHRに園外学習についての報告のこと、みんなにしなければいけないことと、綾崎君がクラスで馴染めていないことと、そのため班のことについて職員室で話をした。

「綾崎か……」

少し難しい顔をして先生は呟く。

「あいつは……綾崎は頭脳明晰なやつだよ。成績も優秀だし、素行も悪くない」

先生は持っていたボールペンで綾崎君の答案をトンツと弾いて言った。

「この答案を見ての通りだ」

先生の手元にある小テストの答案に視線を移す。満点だった。

小さな唸り声を先生は漏らす。視線を向けると、先生は背もたれにもたれかかるような体勢で腕を組むと、手元の湯のみで口を湿らせて続ける。

「両親と家族は仕事で国外に行っているらしいが、服装や風紀の乱れも全く無い。遅刻や欠席もないし、授業中の態度も真面目そのものだ。図書委員をしていて学校の活動も積極的に取組んでいるみたいだな」

（綾崎君は一人暮らしなんだ……）

新しい綾崎君の知らない一面に驚きを覚えつつも相槌をうつ。

「はい」

そこで先生はため息をつく、決定的に綾崎君に足りないものを

言った。

「問題は協調性だな。綾崎には人付き合いを拒絶した何かがある」

「あ……はい。ですね……」

「そう……拒絶するような、無関心……自分すらもどうでもいいような……虚無的で絶対的な壁みたいな」

「……はい」

とてもわかる。先生の言っていることが。

（私は身を持って体験したんだもの……）

図書室での綾崎君の拒絶が、痛烈に頭を走り抜けて眉を寄せる。

「だが、わからないのは、普通そういう人間は一切人付き合いというものを避けるものだ。それこそ徹底的にな。けれど、綾崎は、図書委員に自分から立候補している」

「あ……はい」

確かにその通りだ。

クラスで委員を決める時、綾崎君は自分から立候補して、図書委員に任命された。

「綾崎が積極的に動いている。普段は何に対しても無関心な生徒が、だ。先生は、そこに何かあるんじゃないかと思うんだがなあ……」

内心で私は何度も大きく頷く。確かにその通りだよ。

もしかして、そこに何か綾崎君と仲良くなれる方法があるかも……

「まあ、綾崎は迷惑をかけるかもしれないが、織原の班に加えることにしてくれ。何かあった時に、すぐに先生に知らせなさい」

何となく予想していたから、驚きは少なかったけど、予想通りになったことに少し嬉しさを感じていた。あとなんかそういう風にしむけた自分への罪悪感も……ちょっと感じた。

うつん、でもそれ以上の収穫があった。

「わかりました。すいません、仕事中に。失礼します」

「ああ。織原もご苦労だったな。頑張ってくれ」

短いやりとりを終えて職員室を退出する。

後はクラスのみんなに園外学習についての説明と、決められた班

を次の学年委員会で提出すればOK。

確かに自分の班に 先生の許可もあるし

綾崎君を

迎え入れられる事ができるのは嬉しいけど……。

そんな簡単に、綾崎君が、班に入ることを承諾してくれるだろうか？ もし公然と拒否されたら？

その不安に私は園外学習のことを言い出す機会を、一日一日と延ばしてしまい、数日が過ぎてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8971z/>

陰陽?列伝

2011年12月31日20時48分発行